

女子医学生達の銃後 東京女子医専門学校の夏季無料診療活動

宮喜順子

Women Medical Students at the Home Front: Free Summer Clinic by Students of Tokyo Women's Medical Professional School

- ①はじめに
- ②東京の医療過疎地域とその実態
- ③東京女子医専の夏季無料診療活動
- ④学生活動としての無料診療
- ⑤女性医師としての銃後
- ⑥おわりに

[論文要約]

東京女子医学専門学校では一九三〇年から東京の医療過疎地域において学生主体の夏季無料診療活動を始めた。一五年に渡つたこの活動は他の医大や医專には見られない大規模な活動で、延二四万人の患者を扱い主に救療事業の需要が高かつた新市域で行われた。診療期間は一週間前後で、内科、外科、婦人科、小児科、眼科、耳鼻科、皮膚科（泌尿器科を含む）と、検査部、薬局などで構成され、女子医専付属病院の医師や卒業生らが診察し、学生は看護師的な役割を果たした。患者の割合は眼科と耳鼻科で全体の半数弱、内科、皮膚科、小児科で四割、その他が外科と婦人科というのが全期間を通じての凡そ傾向であった。また、診療のみではなく、寄生虫や花柳病の映画上映、近隣住民の寄生虫検査など、衛生教育や疫学的研究も行っていた。この時期は東京女子医専の発展期に当り、校舎の新設、看護婦や保健婦養成学校の設立などが相次ぎ、それまで医学教育で手一杯であった学校の活動に幅の生じた時期

であった。また、東京では震災や恐慌の煽りを受けて失業者や罹病者が急増し、貧困地区の救療事業が大きな問題となっていた時期で、無料診療活動は行政と地域と学校それぞれの政治的、経済的、教育的事情が絡み合つてこそ続き得た活動でもあった。無料診療活動によって、学生は日頃目にすることのない貧困地域の実態を認識し、衛生教育の必要性や女性医師としての役割などを体得していく。中には進路を決定した学生もいたと思われる。ただ、活動は次第に戦争の影響を受け始め、活動の意義や参加者の意識などに举国一致体制下の「職域奉公」、「銃後の護り」、「健民」の育成といった意味が付加されていった。また、無料診療活動は当時の女性医師の在り方を象徴したものでもあり、徴兵によって不足する男性医師の後を女性医師が担うという医師としての一般的な役割と、予防医学や保健衛生教育の分野で活躍するという女性医師ならではの特殊な役割との両方を備えた活動であつたと見ることができる。